

有限回転変位を考慮した 2次元剛体・ばねモデルの定式化 (その2)

—動的 問題—

Formulation of 2-D Rigid Body Spring Models Including Effect of Finite Rotational Displacement (II)

—Dynamic Problems—

三 藤 正 明*・竹 内 則 雄**・川 井 忠 彦***

Masaaki MITO, Norio TAKEUCHI and Tadahiko KAWAI

1. ま え が き

有限回転変位を考慮した 2次元剛体・ばねモデルの静的問題に対する定式化は文献 1) で示した。そこで、本論文では、動的問題に対する定式化について述べる。本文では、まず剛体内の加速度を示し、この加速度を動的問題に対する増分形仮想仕事式に代入することにより、運動方程式を求めることにする。さらに、数値計算例として片持ち梁を取り上げ、大変形有限要素解と本モデルの解を比較することにより、動的問題に対する本モデルの検討を行う。

2. 増分形仮想仕事式による面内要素の定式化

文献 1) において、有限回転変位を考慮した 2次元剛体・ばねモデルの剛性方程式を誘導した。ここでは、その結果のみを以下に示す。

$$[K_d + K_G - K_P - K_f]\{\Delta U\} = \Delta F + \Delta R \quad (1)$$

$$\Delta F = \Delta F_P + \Delta F_f$$

$$\Delta R = -\Delta R_\sigma + \Delta R_P + \Delta R_f$$

ここで、 K_d は初期変位を考慮した剛性行列、 K_G は幾何剛性行列、 K_P は初期物体力行列および K_f は初期表面力行列である。また、 ΔF_P は物体力による増分荷重ベクトル、 ΔF_f は表面力による増分荷重ベクトルである。そして、 ΔR_σ は初期応力による残差荷重ベクトル、 ΔR_P および ΔR_f はおのおの物体力および表面力による残差荷重ベクトルである。

本論文では、この剛性方程式を利用し、有限回転変位を考慮した 2次元剛体・ばねモデルの運動方程式を示す。動的問題に対する定式化を行うまえに、剛体の任意点での加速度について述べる。いま、3次元の剛体を考える。ここで、剛体の重心点での並進加速度ベクトルを \ddot{U}_G 、 x 、 y 、 z 軸回りの剛体の角速度ベクトルを \dot{O} とすれば、剛

体の運動力学より、剛体内の任意点の加速度ベクトル \ddot{U} は

$$\ddot{U} = \ddot{U}_G + (d\dot{O}/dt) \times r + \dot{O} \times (\dot{O} \times r) \quad (2)$$

として与えられる。ここで、 r は重心点から任意点までの動径ベクトルである。上式を用いて、図-1 に示す 2次元剛体要素の任意点での加速度を求める。重心点での並進加速度を (\ddot{u}_1, \ddot{v}_1) とし、角速度を $\dot{\theta}_1$ とすれば、これらを (2) 式に代入することにより、任意点における x, y 方向における加速度 $\ddot{U}(x, y)$ 、 $\ddot{V}(x, y)$ は以下のようになる。

$$\ddot{U}(x, y) = \ddot{u}_1 - (y - y_{G1})\ddot{\theta}_1 - (x - x_{G1})(\dot{\theta}_1)^2$$

$$\ddot{V}(x, y) = \ddot{v}_1 + (x - x_{G1})\ddot{\theta}_1 - (y - y_{G1})(\dot{\theta}_1)^2 \quad (3)$$

回転角 θ_1 が微小と仮定し、上式の 2 次以上の項を省略すれば、微小変形理論で用いる加速度と一致することは容易に理解できる。つぎに、上式を用いて増分加速度を求める。いま、 x, y 方向の増分加速度を $\Delta\ddot{U}$ 、 $\Delta\ddot{V}$ とすれば、

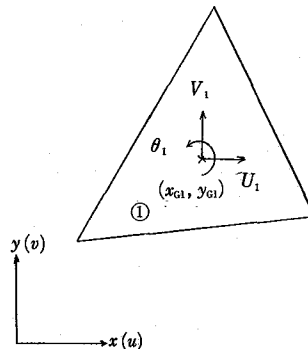
$$\Delta\ddot{U} = \Delta\ddot{U}^{(1)} + \Delta\ddot{U}^{(2)}$$

$$\Delta\ddot{U}^{(1)} = \Delta\ddot{u}_1 - (y - y_{G1})\Delta\ddot{\theta}_1 - 2(x - x_{G1})(\dot{\theta}_1^{(0)} \cdot \Delta\dot{\theta}_1)$$

$$\Delta\ddot{U}^{(2)} = -(x - x_{G1})(\Delta\dot{\theta}_1)^2$$

$$\Delta\ddot{V} = \Delta\ddot{V}^{(1)} + \Delta\ddot{V}^{(2)}$$

$$\Delta\ddot{V}^{(1)} = \Delta\ddot{v}_1 + (x - x_{G1})\Delta\ddot{\theta}_1 - 2(y - y_{G1})(\dot{\theta}_1^{(0)} \cdot \Delta\dot{\theta}_1)$$



X: 重心点

図-1 剛体変位場を仮定した三角形要素

* 五洋建設株式会社

** (株)国際テクノロジー・センター

*** 東京大学生産技術研究所 第2部

研究速報

$$\Delta \dot{V}^{(2)} = -(y - y_{G1}) (\Delta \dot{\theta}_1)^2$$

となる。ここで、上付きの(0)は前段階の加速度であり、(1)、(2)はそれぞれ1次および2次の増分であることを表す。上式を整理して、以下のようなベクトル表示する。すなわち、1次増分については、

$$\Delta \ddot{U}^{(1)} = H_1 \cdot \Delta \ddot{u}_1 + H_2 \cdot \Delta \dot{u}_1 \quad (5)$$

$$(\Delta \ddot{U}^{(1)})^t = [\Delta \ddot{U}^{(1)}, \Delta \dot{V}^{(1)}]$$

$$(\Delta \ddot{u}_1)^t = [\Delta \ddot{u}_1, \Delta \dot{v}_1, \Delta \dot{\theta}_1]$$

$$(\Delta \dot{u}_1)^t = [\Delta \dot{u}_1, \Delta \dot{v}_1, \Delta \dot{\theta}_1]$$

$$H_1 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & -(y - y_{G1}) \\ 0 & 1 & (x - x_{G1}) \end{bmatrix}$$

$$H_2 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & -2(x - x_{G1})\theta_1^{(0)} \\ 0 & 0 & -2(y - y_{G1})\theta_1^{(0)} \end{bmatrix}$$

である。同様にして、2次増分も以下のように表す。

$$\Delta \ddot{U}^{(2)} = \Delta \ddot{u}_1 \cdot N_1 \cdot \Delta \dot{u}_1 \quad (6)$$

$$\Delta \dot{V}^{(2)} = \Delta \dot{u}_1 \cdot N_2 \cdot \Delta \dot{u}_1$$

$$N_1 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -(x - x_{G1}) \end{bmatrix}$$

$$N_2 = \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -(y - y_{G1}) \end{bmatrix}$$

以上により、1次および2次の増分加速度が得られたので、つぎに動的問題に関する増分形仮想仕事式を求める。文献1)で示した静的問題に対する増分形仮想仕事式を参考にすると、動的問題に対する増分形仮想仕事式は次式のごとく与えられる。

$$\begin{aligned} & \sum_{s_0} \int_{s_0} \delta(\delta^{(0)} + \Delta \delta)^t \cdot (\sigma^{(0)} + \Delta \sigma) ds \\ & - \sum_{\sigma} \int_A \int \delta(U^{(0)} + \Delta U)^t \cdot (\bar{P}^{(0)} + \Delta \bar{P}) \\ & - (\gamma/g) (\dot{U}^{(0)} + \Delta \dot{U}) dA \\ & - \sum_{s_0} \int_{s_0} \delta(U^{(0)} + \Delta U)^t \cdot (\bar{F}^{(0)} + \Delta \bar{F}) ds = 0 \quad (7) \end{aligned}$$

ここで、 $\Delta \delta, \Delta \sigma$ はそれぞれ増分相対変位および増分応力である。また、 $\Delta \bar{P}, \Delta \bar{F}$ は増分物体力および増分表面力であり、 γ は単位体積重量、 g は重力加速度である。さらに、 s_0 は要素境界面の領域であり、 \sum_{σ} および \sum_{s_0} はそれぞれ各要素内、要素境界面上の総和をとることを意味する。上式の増分相対変位 $\Delta \delta$ 、増分変位 ΔU および増分加速度 $\Delta \dot{U}$ を1次および2次成分の和、すなわち

$$\Delta \delta = \Delta \delta^{(1)} + \Delta \delta^{(2)} \quad (8)$$

$$\Delta U = \Delta U^{(1)} + \Delta U^{(2)}$$

$$\Delta \dot{U} = \Delta \dot{U}^{(1)} + \Delta \dot{U}^{(2)}$$

で表し、高次項を省略すると以下のように整理することができる。

$$\begin{aligned} & \sum_{s_0} \int_{s_0} \delta(\Delta \delta^{(1)})^t \cdot \Delta \sigma ds \\ & + \sum_{\sigma} \int_{s_0} \delta(\Delta \delta^{(2)})^t \cdot \sigma^{(0)} ds \\ & + \sum_{\sigma} \int_A \int \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot (\gamma/g) \Delta \dot{U}^{(1)} dA \\ & + \sum_{\sigma} \int_A \int \delta(\Delta U^{(2)})^t \cdot (\gamma/g) \cdot \Delta \dot{U}^{(2)} dA \\ & - \sum_{\sigma} \int_A \int \delta(\Delta U^{(2)})^t \cdot (\bar{P}^{(0)} + \Delta \bar{P}) dA \\ & - \sum_{s_0} \int_{s_0} \delta(\Delta U^{(2)})^t \cdot (\bar{F}^{(0)} + \Delta \bar{F}) ds = \Delta F + \Delta R \quad (9) \end{aligned}$$

ここで、

$$\begin{aligned} \Delta F &= \sum_{\sigma} \int_A \int \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot \Delta \bar{P} dA \\ & + \sum_{\sigma} \int_{s_0} \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot \Delta \bar{F} ds \quad (10) \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \Delta R &= - \sum_{s_0} \int_{s_0} \delta(\Delta \delta^{(1)})^t \cdot \sigma^{(0)} ds \\ & + \sum \int_A \int \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot \bar{P}^{(0)} dA \\ & + \sum_{s_0} \int_{s_0} \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot \bar{F}^{(0)} ds \\ & - \sum_{\sigma} \int_A \int \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot (\gamma/g) \cdot \Delta \dot{U}^{(0)} dA \quad (11) \end{aligned}$$

である。(1)式で示した有限回転変位を考慮した剛性方程式を求める際に、加速度に関係する項以外の係数行列およびベクトルは文献1)で示した。すなわち、(9)式では、左辺第1項より K_a 行列、第2項より K_G 行列、第5項より K_P 行列および第6項より K_F 行列である。また、荷重ベクトルとしては、(10)式の右辺第1項および第2項より ΔF_P および ΔF_F ベクトルを求めた。さらに、残差荷重ベクトルとしては、(11)式の右辺第1項より ΔR_G ベクトル、第2項より ΔR_P および第3項より ΔR_F である。ここでは、加速度に関係する係数行列およびベクトルを具体的に示す。まず、文献1)より1次増分変位 $\Delta U^{(1)}$ は、

$$\Delta U^{(1)} = Q_1 \cdot \Delta u_1 \quad (12)$$

$$(\Delta U^{(1)})^t = [\Delta U^{(1)}, \Delta V^{(1)}]$$

$$(\Delta u_1)^t = [\Delta u_1, \Delta v_1, \Delta \theta_1]$$

$$Q_1 = \begin{bmatrix} 1 & 0 & -(y - y_{G1}) - (x - x_{G1})\theta_1^{(0)} \\ 0 & 1 & (x - x_{G1}) - (y - y_{G1})\theta_1^{(0)} \end{bmatrix}$$

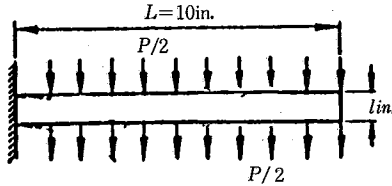
と表される。(5)式と(12)式を(9)式の左辺第3項に代入すると、

$$\begin{aligned} & \delta(\Delta U^{(1)})^t \cdot (\gamma/g) \cdot \Delta \dot{U}^{(1)} \\ & = \delta(\Delta u_1)^t \cdot Q_1^t \cdot (\gamma/g) \cdot (H_1 \cdot \Delta \dot{u}_1 + H_2 \cdot \Delta \dot{u}_1) \quad (13) \end{aligned}$$

となり、ここで

$$M = \int_A \int Q_1^t \cdot (\gamma/g) \cdot H_1 dA \quad (14)$$

$$m = \int_A \int Q_1^t \cdot (\gamma/g) \cdot H_2 dA$$



$E=12000\text{lb}/\text{in.}^2, \nu=0.2$
 $\rho=0.1024 \times 10^{-9}\text{lb. s}^2/\text{in.}^4$
 $p=2.85\text{lb}/\text{in}$

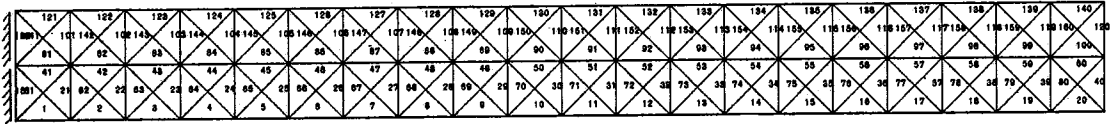


図-2 動的応答解析モデルと要素図

とくと、質量行列 M および速度に関する係数行列 m は、

$$M = (\gamma/g) \begin{bmatrix} A & 0 & 0 \\ \text{---} & A & 0 \\ \text{SYM} & \text{---} & I_{xx} + I_{yy} \end{bmatrix} \quad (15)$$

$$m = (\gamma/g) \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ \text{---} & 0 & 0 \\ \text{SYM: } 2(I_{xx} + I_{yy})\theta_1^{(0)} \cdot \theta_1^{(0)} \end{bmatrix}$$

$$I_{xx} = \int_A (x - x_{G1})^2 dA, I_{yy} = \int_A (y - y_{G1})^2 dA$$

となる。ここで、 A は要素の面積を表す。つぎに、(9) 式の左辺第 4 項より初期加速度行列 K_a を求める。2 次増分変位 $\Delta U^{(2)}$ は文献 1) より、

$$(\Delta U^{(2)})^t = [\Delta U^{(2)}, \Delta V^{(2)}] \quad (16)$$

$$\Delta U^{(2)} = 1/2 \cdot \Delta u_i^t \cdot N_1 \cdot \Delta u_1$$

$$\Delta V^{(2)} = 1/2 \cdot \Delta u_i^t \cdot N_2 \cdot \Delta u_1$$

と表される。ここで、 N_1, N_2 行列は (6) 式で示している。上式を (9) 式第 4 項の被積分項に代入し整理すると、以下の関係が得られる。

$$(\Delta U^{(2)})^t \cdot (\gamma/g) \cdot \ddot{U}^{(0)} = (\gamma/g) (\Delta U^{(2)}, \ddot{U}^{(0)} + \Delta V^{(2)}, \ddot{V}^{(0)}) \quad (17)$$

$$= (\gamma/g) \cdot 1/2 \cdot [\Delta u_1, \Delta v_1, \Delta \theta_1]$$

$$\times \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ \text{---} & 0 & 0 \\ \text{SYM} - (x - x_{G1})\ddot{U}^{(0)} - (y - y_{G1})\ddot{V}^{(0)} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Delta u_1 \\ \Delta v_1 \\ \Delta \theta_1 \end{bmatrix}$$

さらに、(3) 式の関係を上式に代入し積分を実行すると、初期加速度行列 K_a が次式のごとく得られる。

$$K_a = (\gamma/g) \begin{bmatrix} 0 & 0 & 0 \\ \text{---} & 0 & 0 \\ \text{SYM: } (I_{xx} + I_{yy})(\dot{\theta}_1^{(0)})^2 \end{bmatrix} \quad (18)$$

最後に (11) 式の右辺第 4 項より初期加速度による残差荷重ベクトル ΔR_σ を示す。まず、右辺第 4 項に (12) 式を代入すると

- PRESENT ANALYSIS (RBSM)
- SHANTRAN ET AL.
- SOLUTIONS OBTAINED BY BATHE ET AL.
- USING NEWMARK AND WILSON METHODS

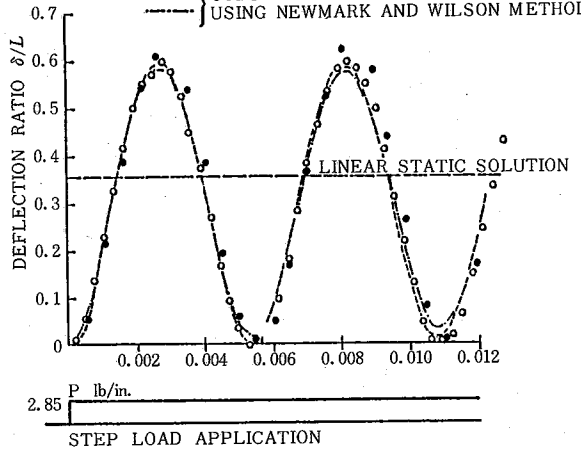


図-3 本モデルの解と有限要素解との比較

$$(\Delta U^{(1)})^t \cdot (\gamma/g) \cdot \ddot{U}^{(0)} = (\Delta u_1)^t \cdot Q_i^t \cdot (\gamma/g) \cdot \ddot{U}^{(0)} \quad (19)$$

となる。ここで、上式の加速度項に (3) 式を代入し、積分すると、

$$\Delta R_a = (\gamma/g) \begin{bmatrix} i_1^{(0)} \cdot A \\ \dot{v}_1^{(0)} \cdot A \\ (I_{xx} + I_{yy})(\dot{\theta}_1^{(0)} + \theta_1^{(0)}(\dot{\theta}_1^{(0)})^2) \end{bmatrix} \quad (20)$$

となる。以上により、有限回転変位を考慮した運動方程式を構成する係数行列および荷重ベクトルがすべて求めたので結果を整理すると、

$$M \cdot \Delta \ddot{U} + m \cdot \Delta \dot{U} + (K_a + K_G + K_a - K_p - K_f) \{ \Delta U \} = \Delta F + \Delta R \quad (21)$$

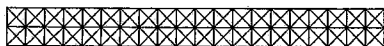
$$\Delta F = \Delta F_p + \Delta F_f$$

$$\Delta R = -\Delta R_\sigma + \Delta R_p + \Delta R_f - \Delta R_a$$

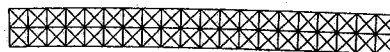
となる。

研 究 速 報

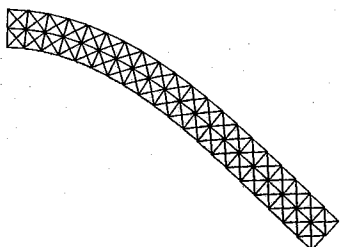
STEP=1 TIME=0.00000 秒



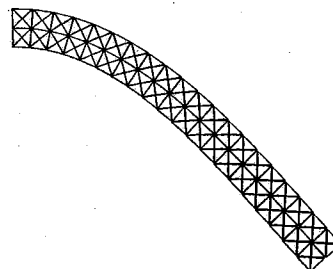
STEP=61 TIME=0.00600 秒



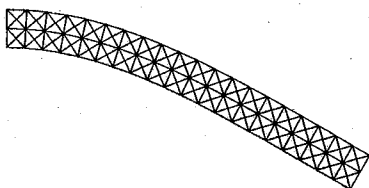
STEP=21 TIME=0.00200 秒



STEP=81 TIME=0.00800 秒



STEP=41 TIME=0.00400 秒



STEP=101 TIME=0.01000 秒

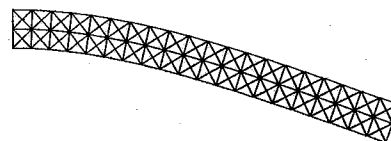


図-4 各時刻の応答変位図

3. 有限回転変位を考慮した片持ち梁の動解析

有限回転変位問題に対する精度の検討を行うために、図-2 に示される片持ち梁を取り上げ、動的解析を行った。このモデルは文献 2) に示されるように、Shantran らが 8 節点アイソパラメトリック要素を用いて、動的大変形解析を行ったモデルと同じものである。荷重としては、等分布荷重をステップ荷重として作用させた。なお、解析に際しては荷重の半分を片持ち梁の上、下面に作用させた。

図-3 に解析結果を示す。横軸に時刻、縦軸には梁長に対する先端部の鉛直変位の比を取っている。図中、●印が本モデルによる解であり、○印が Shantran らの解である。本モデルでは、時間きざみ $\Delta t=0.0001$ 秒としている。Shantran らは陽解法を用いて運動方程式を解いているため、時間きざみ $\Delta t=0.00001$ 秒と本モデルの場合と比べて小さい。また、破線および 1 点破線が Bathe らが有限要素を用いて、陰解法により求めた値である。全体的に本モデルの値は Shantran らの値と比べて周期的にやや長目の値を示している。図-4 に時刻 $t=0$ 秒から $t=0.01$ 秒までの、0.002 秒きざみの応答変位を示す。

4. ま と め

有限回転変位を考慮した 2 次元剛体・ばねモデルの運動方程式を導いた。さらに、有限回転変位を考慮した動的の問題に対する精度の検討を行うために片持ち梁の動的大変形解析を行い、有限要素解と本モデルの解を比較したところ、全体的に良好な精度で解が求まることがわかった。本手法は土の粒子そのものの挙動を扱うミクロレベルの粒状体力学へ適用するとその偉力が期待できるものと思われる。今後は数多くの数値解析を行うことにより、動的の問題に対するデータの蓄積が必要であろう。

(1985 年 6 月 18 日受理)

参 考 文 献

- 1) 三藤正明, 竹内則雄, 川井忠彦: “有限回転変位を考慮した 2 次元剛体・ばねモデルの定式化 (その 1) -静的問題-”, 生産研究, VOL. 37, No. 9, (1985)
- 2) D.Shantran, D.R.J.Owen, O.C.Zienkiewicz: “Dynamic Transient Behaviour of Two and Three Dimensional Structures Including Plasticity, Large Deformation Effects And Fluid Interaction”, Earthquake Engineering and Structural Dynamics, Vol.4, (1976)